

おんみょうじ
陰陽師クラブへようこそ④

うしな りゅう ちから と もど
失われた龍の力を取り戻せ！

うづき
卯月みか・作

あめみや
雨宮もえ・絵



アルファポリスきずな文庫

目次

プロローグ 006

第一章 龍の骨と謎のカラス

- 一. 博物館、到着！ 019
- 二. 大昔のゾウ 023
- 三. おかしなカラス 029
- 四. ヤタガラスのさがしもの 035

第二章 突然のお泊まり！

- 一. トラブル発生！ 047
- 二. 超常現象研究会 050
- 三. 満天の星 056
- 四. 伝説のように 069
- 五. 一件落着 080



第三章 ハロウィンにはご用心！

- 一. 仮装、する？しない？ 087
- 二. ハロウィンがやってきた！ 096
- 三. 宝さがしゲーム、開始！ 108
- 四. あやしい影 114
- 五. 邪悪な妖精 123
- 六. ドレス姿の貴婦人 133

第四章 龍骨を求めて

- 一. クリスマスのお買い物デート 141
- 二. 悪魔の召使い 148
- 三. 子どもたちだけの旅 160
- 四. 龍哭寺の宝物 167
- 五. 真冬のイチヨウ 182

エピローグ 196

あとがき 204



登場人物

真白

ま 歩 あいほう くだぎつ
真結の相棒の管狐。
小さい頃から一緒!

皇美紅

おんみょうじ ふうぶ
陰陽師クラブの副部長の中学一年生。北斗のいとこで、陰陽師一族の本家の娘。

花村真結

ねんまえ 1年前につばさ小に
転校してきた小学六年生。幽霊とか妖怪とか、“見えちゃイケナイ”ものが見える!?

葛城北斗

おんみょうじ ぶちやう
陰陽師クラブの部長をつとめる中学一年生。おんみょうじ まゆ 陰陽師の末裔で、真結をクラブに勧誘した。

西山龍太郎



いなり じんしゃ あとと ちやうかく
稻荷神社の跡取りの中学一年生。神様の気配が感じられる現。

星野ミナ



うさ とき い しやうかくるねん
占いが得意な小学六年生。イギリス人の魔女の血を引いている。

志川螢木



ひやう いたいしつ ちやうかくるねん
憑依体質の中学一年生。アイドルのような美少年で、女子に人気。

神宮寺先生



おんみょうじ こもん
陰陽師クラブの顧問。

江藤光麟



ちやう せいと かいちやう
つばさ中の生徒会長。

九条茉莉花



ちやう せいと かいふくかいちやう
つばさ中の生徒会副会長。

碧さん



しやう せいと かいふくかいちやう
つばさ小のイチヨウの木の下に骨が埋まっている龍。

志川京香



けいた だいがくせい おね
蛍太の大学生の姉。

つばさ小のモネと絵



はな こ え
トイレの花子さんと絵を描く幽霊の高梨くん。

これまでのおはなし

私、花村真結は転校先の私立つばさ小学校で“見えちゃイケナイ”ものが見える仲間の陰陽師クラブに出会ったんだ! どうやら、学校をずっと見守ってきた碧さんの力が消えかけているみたい。どうにかして、碧さんを助けたいと思う私たちだけど——?

プローグ

「わあ！ ここが大学かあ！ 広い！」

大学のキャンパスに入って、私——花村真結は声を上げた。

私たち、陰陽師クラブのメンバーは、今日、つばさ中学校と高校の敷地の隣に建つ、つばさ大学に来ている。

「ニノマエ教授の研究室があるという建物はどこだろうか？」

校門のそばにあった大学の構内案内図に歩み寄り、葛城北斗くんが場所を確認する。

「教授の研究室があるのはA棟の二階だと聞いている。もっと奥のようだな」

西山龍太郎くんが案内図に向かって指をさした。

私たちがつばさ大学に来たのは、昔、つばさ小学校があつた土地で見つかったといわれている龍の骨について、ニノマエさんという大学の先生に話を聞くため。

約束を取り付けたのは、ニノマエさんと知り合いだという、西山くんのおじいさんだ。つばさ小学校のグラウンドのすみに立っているイチヨウの木には、『碧』という名前の、人間ではない男の人が住んでいる。碧さんはもともと龍だったんだって。

碧さんは昔、大嵐を収めて村の人々を助けようとした時に、力およばず死んでしまったんだそう。

その後、感謝した村の人々が、碧さんの骨を埋葬して祠を建ててお祀りしたんだけど、誰か悪い人が、碧さんの頭の骨を盗み出して、その土地を治めていたお殿様に渡しちゃったらしいきつと、お金をもらおうとしたんだろう。

幽霊になつても人々を守ろうとしていた碧さんは、頭の骨を失つたことによつて、ほとんど力がなくなつてしまつた。

今は、わずかに残つた龍の力を吸い上げたイチヨウの木のそばで、亡霊みたいな状態で存在している。力が尽きたら、碧さんは消えてしまうかもしれない。

私たちはそれをふせようと、碧さんの頭の骨をさがし出したいと考えているんだ。

ニノマエさんの研究室を目指して歩きながら、周囲をきよろぎよろぎしていた星野ミーナが首をかしげた。

「大学って、あんまり人がいないねえ」

ミーナは、私と同じつばさ小学校の六年生で、ふわふわの髪がかわいい、癒やし系の女の子。おばあちゃんがイギリス人の魔女で、ミーナ自身も占いが得意だったり、ハーブにくわしかつたりする、魔女の卵なんだ。

私たちの横を、時々、大学生っぽいお兄さんやお姉さんが通り過ぎていくけど、ミーナの言うとおり人数は少ない。

ミーナにつられて、大学生たちを視線で見送った皇美紅さんが答えた。

「今は夏休みだもの。図書館に用事のある人ぐらいしか、登校してないのじゃないかしら？」

皇さんはつばさ中学校の一年生。きれいなロングヘアをかき上げるしぐさも様になる美人さん。

陰陽師一族の当主の家に生まれた跡継ぎで、日々、陰陽術の修行にはげんでいる努力家だ。

「そつかり。じゃあ、普段の大学とは様子がちがうってことか」

衣川螢太くんが、皇さんの言葉を聞いて、残念そうに頭の上で手を組んだ。

衣川くんもつばさ中学校の一年生。アイドル歌手みたいに甘い顔立ちをしていて、女の子に優しいから、中学校でもモテているらしい。

なんと、衣川くんの超常能力は憑依体質。霊や妖怪に取り憑かれやすくて、時々大変な目に

あっている。

「大学ってどんなところか楽しみにしてたんだけどな」

「……学生がいなくても、雰囲気はわかる。広くて建物もたくさんあるし、教室も多そうだ」

衣川くんの言葉に反応したのは、同じくつばさ中学校一年生の西山龍太郎くん。

西山くんは無口な性格で礼儀正しく、ちよつと武士っぽい。竹刀をたずさえていることが多いんだけど、今日は大学の先生をたずねるから、さすがに持つてきていないみたい。

稲荷神社の息子さんと、神様の声が聞こえる魂でもある。

「大学に入れば、専門的な勉強ができる。早く大学生になりたいものだ」

先頭を歩いていた葛城くんが、軽く振り向いて微笑んだ。

葛城くんは皇さんの同い年のいとかだ。

葛城くんも陰陽師で、皇さんとは、小さな頃から一緒に怪奇現象を解決してきた相棒でもある。

そして、私たちが所属している陰陽師クラブの部長で、私の彼氏なんだ。

陰陽師クラブっていうのは、普通の人にはない不思議な力を持つ私たちが、霊や妖怪がおこ



す事件を調べたり、解決したりしているクラブのこと。

——と、いつても、学校から認められているわけではなく、私たちが勝手に結成した非公認のクラブなんだけどね。

私の肩の上に、突然、白くて体の長い小動物が現れた。

『きゅいっ!』

このイタチのようなキツネのような動物は、私が飼っている管狐っていう妖怪で、名前は真白っていうの。

真白はもともと、私がこの街へ引越してくる前、田舎にいた時に仲がよかった近所のおばあちゃんの家に住みついていていた妖怪だった。おばあちゃんが亡くなった後、行く場所がなくなってしまうと、私が引き取ることにしたんだ。

真白が、ふわふわの尻尾で私の頬をくすぐる。何か言いたいことがあるのかなと思って振り返り向きかけたら、ちょうど通り過ぎようとしていた建物に、A棟で書かれたプレートがかけられていた。

「葛城くん! ニノマエ教授の研究室があるA棟って、ここじゃないですか?」

少し前を歩いていた彼を呼び止めて、建物を指さす。

葛城くんは建物を見上げてうなずいた。

「そのようだな」

ガラス扉を押し開け、先頭に立って中に入っていた葛城くんの後に、私たちも続く。

「恐びこんでいるみたいで、なんだか緊張するなあ」

がらんとした静かな廊下を歩きながら、衣川くんがわくわくした顔で言う。

二階に上がると、廊下には扉が並んでいた。

扉にはそれぞれ名札がついている。その部屋を使っている教授の名前なんだろう。

私たちは廊下を進み、二ノマエ教授の研究室をさがした。

「あ、ここじゃないかなあ？」

ミーナが指さした扉には、『一克徳』と書かれたプレートがついていた。漢数字の『一』って書くこの名字は、二ノマエって読むんだって。

葛城くんは気を引き締めるように緊張した表情を浮かべた後、コンコンと扉を叩いた。すぐに、部屋の中から「はい」と返事がある。

葛城くんが、ゆっくりと扉を開ける。

「失礼します。つばき中学校一年の葛城北斗といいます。二ノマエ先生からお話を聞きたくて、たずねてきました」

すると、ついたての奥から、おじいさんがひよつこりと顔を出した。

髪の毛は白髪之交じた灰色で、短い口ひげを生やしている。

ページュのズボンの上に、ハニワの絵が描かれたTシャツを着ていた。

……なんでハニワ？

ちよつとびつくりしたけど、それよりも私が驚いたのは、二ノマエ教授の研究室の様子だった。

壁一面が棚になっていて、ぎつしりと本が詰めこまれている。床にもたくさん本が積み上げられていて、少しでもぶつかつたらなだれをおこしてしまいそう。

応接セットみたいなソファもあつたけど、その上にも本が散らばっているから、座る場所がない。

壁に立てかけられている脚立は、高い場所にある本を取るためのものなのかな？

これが、大学教授の部屋……！！

みんなも私と同じように驚いているのか、ぽかんとしている。

葛城くんが、歩み寄ってきた二ノマエさんに丁寧にうなづいた。

「本日はお時間をいただき、感謝いたします」

礼儀正しい葛城くんを見て、二ノマエさんは感心したように微笑んだ。

「西山さんから、龍の骨に興味のある小学生と中学生がいると聞いて、私もあつてみたいと思っていたんだよ。さあ、そちらへ座りなさい。……おっと、場所がなかったな」

二ノマエさんは「ははは」と笑いながら、ソファの上の本をどけて、私たちが座る場所を作ってくれた。

「ちよつと待つておいで」

ソファ―に腰を下ろした私たちに声をかけ、ニノマエさんは脚立にのぼった。

「よいしょ」と言いながら、棚の真ん中あたりに置いてあった、細長い木の箱を手取る。

ニノマエさんは箱をテーブルに下ろすと、自分もソファ―に座った。「これだよ」と言いながら、箱にかけられていたくみひもをほどく。

ニノマエさんが箱のふたを開けると、中には、一本の古そうな巻物が入っていた。

興味津々の私たちの前で、ニノマエさんは丁寧な手つきで巻物を取り出すと、テーブルの上に広げた。

私たちは息をのんだ。

そこには、私が歴史博物館で見たのと同じ龍の骨の絵が描かれていた！

驚く私たちに、ニノマエさんが説明をしてくれる。

「私の実家は古い家だね。これは、うちの蔵の中に納められていたんだ。どういたいきさつでうちにあったのかはわからないが、動物の骨を描いたものだと思われる。ここに文章が書かれてるんだが……」

そう言いながら、ニノマエさんは、骨の絵の横にある筆で書かれた文字を指さした。

「土地をたがやしていた村人が土の中から龍の骨を見つけ、領主に献上した……という意味合

いのことが記されている」

「戦国時代の年号が書かれていますね」

ニノマエさんは、文章を読み取った葛城くんに驚いたのか「ほう」と感心した表情を浮かべた後、さらに解説を続けた。

「当時の学者が調査をして、記録として残したのが、この『龍骨ノ図』なのだろう。写实的に描かれていて、博物学的関心の高さがうかがえる」

ニノマエさんの話は難しくてよくわからなかったけど、昔の学者さんが「龍の骨なんてめずらしい。すごい！」って思っ、くわしく調べたってことなのかな？

「じゃあ、本当に龍の骨はあったんだ！ 碧に教えてあげなきゃ！」

興奮している衣川くんの膝を、「落着け」と言うように、西山くんが軽く叩いた。

「碧は亡くなった後、手厚く埋葬されて、村人にお祀りされたのだろう。その後、頭の骨だけ誰かに盗まれたという話だった。ニノマエさんのおっしゃった話の内容と、少しちがう」

西山くんの言葉に、衣川くんは「本当だ」と目をまたたかせた。

「おそらく、お殿様——その時の領主に献上した者が、うそをついたのではないだろうか」

葛城くんが腕を組んで、考えこみながらつぶやく。

「うそとは？ 碧とは誰のことだい？」

私たちがなんの話をしているのかわからないニノマエさんに、皇さんが、
「私たちの母校、つばさ小学校がある土地に、昔、龍をお祀りした祠があつたようなんです」
と、説明した。

皇さんの話を聞いたニノマエさんが興味深げな顔をする。

「龍の祠？ そのような伝説は聞いたことがない。ロマンがあるね」

ニノマエさんはそう言うってほがらかに笑った後、話を続けた。

「期待をしている君たちをがっかりさせてしまうかもしれないが、ここに描かれている骨は、おそらく龍の骨ではないんだ」

私たちは一斉に「えっ！」と声を上げた。

「古代に生息していたゾウの骨の化石だと考えられているんだよ」

「ゾウの化石……」

ぼかんとした私を見て、ニノマエさんが申しわけなさそうに微笑む。

「君たちの夢を壊してごめんよ。当時の人は、見たこともないゾウの化石を発見して、龍の骨だと思っただろうね」

私たちは顔を見合わせた。みんな、何も言わない。

龍の骨について聞こうと思って来たのに、予想外の話になって、落胆しているんだろう。

しゅんとしている私たちをかわいそうに思っただのか、ニノマエさんはあわてたように両手を振った。

「いやいや、そうは言っても、この絵が本当にゾウの骨だとは言えないと思うんだ。もしかししたら、君たちが考えるように、実は龍の骨だったのかもしれない。私たちは当時の人じやないんだから、何が本当なのか、確実なところはわからない。それを、文献史料、考古学史料、あらゆる方面から調べ、推測し、真実をさがし出す——だから歴史の勉強は面白いんだよ」

ニノマエさんの熱い言葉を聞いて、葛城くんの目に輝きが戻る。

「ええ、確かにそうですね。俺たちも、もう少し調べてみようと思います」

「それなら、隣の県にある博物館に行つてごらん。古代に生きていた動物に関する展示もあつたはずだ」

私たちは再び顔を見合わせた後、ニノマエさんに向かって「はい」とうなずいた。

ニノマエさんにお礼を言つて研究室を出た私たちは、ここへ来た時の元気をなくしていた。

「龍の骨じゃなかったのかあ……」

衣川くんの残念そうな声を聞いて、私もあらためてがっかりした気持ちになる。

「でも、ニノマエさんは、断言できないとおっしゃっていたわ」

皇さんがそう言うのと、葛城くんも「ああ」と相づちを打った。

「俺たちは当事者である碧から話を聞いているのだ。彼がうそをついているとは思えない。碧の骨は、確かにどこかにあるのだ」

「そうだな」

西山くんも葛城くんと同じ考えみたい。

「じゃあ、次はみんなで隣の県の博物館に行ってみましょう」

ミーナが両手を叩いて、明るい声で提案した。

「考えているだけじゃわからないもんね」

気を取り直した私を見て、みんなも気持ちを切りかえたみたい。

「そのとおりだ。ここでただ考えているだけでは、何もわからない。行動することが大事なのだ」

葛城くんの力強い言葉に、私たちは一斉にうなずいた。

第二章 龍の骨と謎のクラス

一・博物館、到着！

「真結ちゃん、ミーナちゃん、クッキー食べる？」

ミニバンの助手席に座っている衣川くんが、後部座席の前列シートに座る私とミーナに個包装のクッキーを差し出した。

「わあ、ありがとうございます」

ミーナが嬉しそうにクッキーに手を伸ばす。

私もお礼を言つて、衣川くんからチョコチップクッキーを受け取った。

チョコチップクッキーの袋を開けながらも、私はさつきから、二列目のシートに座る葛城くんと皇さんの会話が気になって仕方がない。

「頭領は今、出張中だとか？」

「ええ、あちこちで不審死が立て続けに起こっているとかで、調査に行っているわ」

「不審死？」

「人がいきなり道路に飛びだしたり、川に飛びこんだりするんですって。助かった人の中には、直前にあやしい女に出会って、気が付いたら危ない目にあっていた」って言う人もいるらしいの」

「あやしい女？ ……呪いのたぐいだろうか？」

内容がぶつそうすぎて、中学一年生がする話じゃないような……？

陰陽師一族の中では、こんな会話はいつものことなんだろうか。

不穏な話をしている二列目の二人の後ろ、三列目のシートからは、すうすうという寝息が聞こえてくる。

膝に竹刀をはさんで抱えた状態で、西山くんが寝ている。

昨日、剣道の試合があったんだって。きつと疲れているんだろう。

「みんな！ 目的地が見えてきたわよう！」

明るい声を上げたのは、運転席でハンドルをにぎっている若い女の人の。

衣川くんとよく似た、アイドル歌手のようなかわいい顔立ちの女の人は、衣川くんのお姉さん。

んの京香さん。

衣川くんにはお姉さんが二人いて、長女の遙香さんは会社員。今日、私たちのために車を出してくれた次女の京香さんは大学生なんだって。

ニノマエさんが「行っってごらん」と言っってくれた博物館は、隣の県の山の上にあつた。

電車も通っていないし、子どもたちだけで行くのは難しいと悩んでいたら、その話を衣川くんから聞いた京香さんが「それなら私が連れていっってあげよつか？」って言っってくれたんだ。フロントガラスの向こうに、博物館の看板が見えた。

京香さんは博物館の駐車場に車を入ると、見事なハンドルさばぎで停めた。

「着いた着いた〜！」と声を上げながら、みんな、車から降りる。

外の空気は湿っていて、朝は晴れていた空は、どんよりとくもっていた。

そういえば天気予報で「午後からは激しい雨になるので注意しましょう」って言っていたつ。け。

通路にそって歩いていくと、目の前にコンクリートの大きな建物が見えてきた。これが博物館の建物みたい。

「入り口はあっちね」

京香さんが指をさした先にガラス扉がある。

私たちはぞろぞろと入り口へ向かった。

自動扉を通って建物の中に入ると、入場券売り場があった。

入場券代とおやつ代は、お母さんからもらってきていたので、一人ずつ自分で買ってゲートをくぐる。

九月の三連休だというのに、見に来ている人はあまりいないみたい。広いわりには、館内はがらんとしていた。

「すいてるなあ」

周囲をきよきよと見回す衣川くんに、西山くんが、
「山の上だから。気軽に遊びにくるには遠いのだろう」

と言った。

「えーっと、順路は……二階からスタートするみたい」

私は、入場券売り場でもらった館内マップを開いた。

展示室はAとBとCの三つ。AとBが二階で、Cが一階って書いてある。

「では、Aから回ろうか」

私の横からマップをのぞいていた葛城くんが顔を上げた。

エスカレーターに向かおうとした私たちに、京香さんが声をかけてくる。

「私、こういうのにあんまり興味がないから、カフェテリアでのんびりしてるわね。みんなはゆっくり見学してきたらいいわよ。じゃあね」

ひらひらと手を振って、一階にあるカフェテリアへと歩いていく京香さんを見送った後、私たちはエスカレーターにのった。

二・大昔のゾウ

まず、展示室Aに入った私たちは、目に飛びこんできた巨大な模型を見て「わあっ！」と歓声を上げた。

「ゾウだ！」

衣川くんが興奮した様子で前方を指さす。

衣川くんの言うとおり、広い展示室の真ん中に、大きくてリアルなゾウの模型が展示されて



いた。

その奥には、骨格や牙の展示も見える。

模型を回りこんでゾウの骨に近寄ると、説明書きの看板が立っていた。

「アケボノゾウ……ですって」

皇さんが書かれている内容を読み上げる。

『約二二〇万〜一八〇万年前に、岩手県より南の日本各地にすんでいたゾウ』って書いてあるわ。これは、発見された骨の化石をもとに復元した骨格ですって」

「一二〇万年前！」

驚きの声を上げた私の隣で、ミーナもしきりに「すごいすごい」と感心している。

「みんな、こっちに来てみたまえ」

葛城くんが熱心に見ていたのは、骨格の足下に展示されている、ゾウの頭の骨だった。これも復元されたもので、本物ではないと書いてある。

『ミエゾウの頭骨。約三〇〇万〜四〇〇万年前に日本列島に生息していたゾウ——こっちのゾウより、ずっと前のゾウってことですか!?』

説明書きを読んで、私は驚きの声を上げた。

ゾウって、今は動物園にしかないのに、大昔は普通に日本中をうろろしていたのかな？
 なんだか不思議。

何百万年も前に思いを馳せていたら、ゾウの復元頭骨を見ていた葛城くんが口を開いた。

「ニノマエさんに見せていただいた龍の骨の絵と、この頭の骨は、似ている気がしないかね？」
 言われてみれば、確かにそう。

「やっぱり、ニノマエさんの言うとおり、巻物に描かれていた龍の骨はゾウの骨だったんで
 しょうか？」

私の質問を聞いて、葛城くんがあごに指を当てた。考えこむ時の、彼のくせだ。

「……………」

「巻物の骨は、やっぱり龍の骨じゃないってことかよー！」

黙りこむ葛城くんの横で、衣川くんが自分の髪の毛をぐしやぐしとかき混ぜながら、残念
 そうな声を上げる。

「決めつけるのはまだ早いわ。ニノマエ先生も、当時の人ではないから確実なことは言えな
 いておつしやっていたでしょう？ さまざまな方向から調べるのが大事だって」

皇さんの言葉を受けて、葛城くんが顔を上げた。

「美紅の言うとおりだ。まずは、ここの展示を見て回ろう」

展示室Aでは、大昔に生息していたゾウについての研究や、さまざまなほにゅう類の化石、
 気候変動により、この地域に生えていた植物が変わっていた歴史などについての紹介がされ
 ていた。

知らないことばかりだったので、展示を見ながら、私たちは何度も「へえー」と感心した。
 ひととおり見て最後の壁面まで来た私は、思わず「あつ！」と大きな声を上げた。

そこには、ニノマエさんに見せてもらった『龍骨ノ図』とよく似た絵が、額に入れられて飾
 られていた。

ニノマエさんの巻物とちがうのは、頭の骨のほかに、前足の骨や、後ろ足の骨、背骨なども
 描かれているところだ。ニノマエさんの巻物とは別に存在する、龍の骨の絵なのかもしれない。

『バラバラに出てきたトウヨウゾウの化石を見た当時の人々は、これを龍の骨と考え、組み合
 わせて龍骨図が描かれました』

絵の横に添えられていた解説を読んで、私はがっかりしてため息をついた。

これって決定的だよな。

昔の人は、やっぱり、ゾウの化石を龍の骨だっと思ったんだ。

「龍の骨なんてなかったんだ……」

残念な気持ちでつぶやいたら、葛城くんが私の隣で「いいや」と首を横に振った。

「龍の骨はある。龍は架空の存在ではない。我々は、碧という龍に出会っているではないか」
力強い葛城くんの言葉に、私の胸に希望が戻る。

そうだよ。私たちは碧さんに会っているんだもん。この世に、龍という不思議な生きものが、確かに存在しているんだってことを知っている。

「碧さんの骨……見つけてあげたいです。きつとどこかにありますよね」

「俺もそう願っている」

二人で気持ちを確認し合っていたら、

「そのとおりだ。龍の骨はある」

背後から西山くんの声が聞こえた。

振り向くと、いつの間に集合していたのか、ミーナ、皇さん、衣川くん——みんなが、私たちの後ろに立っていて、西山くんの言葉にうなずいていた。

思慮深い皇さんが、慎重な面持ちで口を開いた。

「碧の骨は、確かにあったのだと思うわ。でも、それは数百年前の話。現在も残っているとは

限らないと思うの。かつては誰かが持っていたとしても、長い年月の間になくなったり、捨てられてしまった可能性もあるのではないかしら？」

「その可能性は否めない……」

葛城くんの眉間に、しわが寄る。

再び沈みかけた空気を変えるように、衣川くんがパンツと手を打った。

「龍の骨については、あとでもう一度みんなで考えようよ！ せっかく博物館に來たんだから、他の展示室も見に行こうぜ」

確かに、わざわざ隣の県の中の山の中で來たんだもん。

入場券を買って入ったんだし、全部見て回らないともつたいないよね。

三．おかしなカラス

私たちは展示室Aを出ると、気を取り直して、展示室Bに移動した。
展示室Bは、昔、人々はどのような生活をしていたのかという内容になっていて、実際に使

われていた農業や漁業の道具が置かれていたり、田舎の古民家が再現されていたりした。

展示室Bの次は、一階にある展示室Cに向かう。

展示室Cに足を踏み入れた私たちは、思わず息をのんだ。

円形に配置された大きなガラスケースの中に、数え切れないほどのさまざまな動物や鳥たちの剥製が陳列されていた。

生きている姿そのままなのに、ぴくりとも動かない剥製たちは迫力があって、私は足がすぐんでしまった。

そんな私とは対照的に、ミーナ、皇さん、衣川くん、西山くんは、興味をひかれた様子で展示室へ入っていく。

「生きているみたいですよ」

「すごいわね」

「迫力〜！」

「クマもいるな」

命のない剥製たちが、なんだか怖くて、私はガラスケースに近づくことさえできない。

みんなの後について行けずにまごまごしていたら、耳元で声が聞こえた。

「大丈夫だ。俺がそばにいる」

びつくりして振り向くと、葛城くんが前かがみになり、私の顔をのぞきこんでいた。

ち、近いっ……！

あまりにも距離が近かったので驚いてしまったけど、葛城くんの顔つてやつぱりきれいだなあってみとれてしまった。

剥製が怖いというドキドキが、別のドキドキに変わる。

「手をつないであげたいところなのだが、みんなもいるからな……」

手を伸ばしかけて、ためらうように引っこめ、葛城くんが苦笑いを浮かべる。

そういうえば、前に一緒に遊園地に行った時、お化け屋敷を怖がる私と手をつないでくれたっけ。

「そ、そうだね、みんなもいるもんね……」

あの時のことを思い出して、照れくさくなつて視線をそらすと、ふいに頭上から羽音が聞こえた。

バサバサッ！

建物の中なのに鳥がいるの？

驚いて顔を上げると、ガラスケースの上に、いつの間にか、黒々とした体のカラスがとまっていた。

カラスは私と目が合うと、よく通る声で『カァ』と鳴いた。

「どうしてこんなところにカラスがいるのかな？」

私と同じように、他のみんなもカラスに気付いたみたい。

ガラスケースの上を見上げて驚いている。

あの子、館内に迷いこんじやったのかな？

でも、自動扉から、野生のカラスが入りこんでくるものかなあ？

もしそうなら、博物館の係員さんが気付いて、追い出してしまいそう。

そう考えて、私はハツと思いついた。

「もしかして、剥製が生き返ったとか？ カラスの……幽霊？」

さあつと青くなった私の肩に、葛城くんが手をのせる。

「安心したまえ。あれはカラスの幽霊ではないよ。超常現象であることには間違いないがね。

花村君、あのカラスの足をよく見てみたまえ」

葛城くんが、すつと腕を上げ、カラスを指さす。

私はカラスに向かって目をこらし、「えっ!?」と声を上げた。

「足が三本ある！」

見間違いないんじゃない。確かに足が三本ついている。

「あんなめずらしいカラス、初めて見ました！」

足が三本ある種類のカラスっているの？

首をかしげている私に、葛城くんが楽しそうな声で教えてくれる。

「あれはおそらくヤタガラスだよ。ヤタガラスは神様のお使いなのだ」

「神様のお使い……?」

神聖なカラスってこと？

私たちが話していると、先を行っていたみんなも戻ってきた。「あの変わったカラスはなんだろう?」と興奮した様子で話している。

葛城くんはみんなが集まると、落ちていた声音で説明を始めた。

「神様の時代、日本がまだまとまっていなかった頃、神武天皇という人が日本を統一しようとした時に、アマテラスオオミカミにつかわされて、道案内をしたのがヤタガラスだといわれている」

「アマテラス？」

その人、誰？

首をかしげている私に、葛城くんではなく、西山くんがくわしく教えてくれる。
「日本神話に登場する神様の名前だ。神様たちが住んでいる天上界、タカマガハラを治めていた、太陽神だよ」

さすが神社の息子の西山くん。神様にくわしい。

バサッ！

じつとしていたカラスが羽ばたいた。

ガラスケースの上から飛び立ち、私たちの頭上をくるくると円を描くように回った後、まるで「ついて来い」とでも言うように『カァ』と鳴いて、展示室を出ていった。

「追いかけてみよう」

葛城くんが早足で歩き出す。

一階のフロアを横切っていくヤタガラスの姿に、博物館の係員さんも、他のお客さんたちも、誰も気が付いていないみたい。

やつぱりあのカラスは普通のカラスじゃないんだ。

ヤタガラスは『ライブラリー』と看板のかかった部屋へ入っていく。
カラスのあとを追って、私たちもライブラリーに向かった。

四・ヤタガラスのさがしもの

ライブラリーは展示室に比べると小さな部屋で、標本と図書が収められた研究室のような場所だった。

棚の上にはみがかれる前の水晶が並べられていたり、壁にはタヌキやイタチの毛皮がぶらさがっていたり、チョウの標本が入った額が飾られていたり、なんだか理科の特別教室っぽい。本棚には、図鑑や絵本のほかに、難しそうなおとなの本も並べられている。

ヤタガラスは私たちを待ちかまえていたかのように、閲覧デスクの上に立っていた。
私たちはそろりそろりとヤタガラスに近付いた。カラスはじつとしていて、逃げる様子はない。ただ静かに私たちの顔を見上げている。

その真っ黒な瞳を見ていたら、私の口から自然とつぶやきがもれた。

「この子、私たちに何か伝えたいのかな……？」

私の声に反応したのか『きゅいつ』という鳴き声とともに、真白が現れた。

「真白！」

真白は閲覧デスクの上に飛び降りると、ちょこちょことヤタガラスのそばに歩み寄った。

真白に気付いたヤタガラスが、話しかけるように『カァカァカァ』と鳴く。真白もそれを受けて『きゅいきゅい』と鳴いている。まるで会話をしているみたい。

しばらくの間、ヤタガラスと鳴き合いっこをしていた真白が振り向いた。後ろ足で立ち上がり、ある場所に向かって前足を伸ばし、しきりに何かを訴えてくる。

『きゅいつ！ きゅいつ！』

「真白君は何を言っているのだろう」

葛城くんが答えを求めるように私を見る。

真白は人間の言葉がしやべれるわけじゃない。でも、真白といつも一緒にいる私には、真白が何を伝えたいか、なんとなくわかるんだ。

真白は短い前足をパタパタと動かしながら、私と、本棚を交互に見ている。

「本棚に何かあるの？ もしかしてこのカラスさんは、本をさがしているとか？」

私の思い通りに、真白は『そうそう』と言うように、うなずいた。
私たちは真白が教えてくれた本棚に歩み寄った。

「ヤタガラスがさがしている本とは、どのようなものなのだろう」
首をかしげる葛城くん。

私も、みんなも困った顔になる。

「カラスがのっている本……とか？」

「つまり、図鑑などということかしら？」

皇さんの推測に、衣川くんと西山くんも顔を見合わせる。

「仲間に興味があるってこと？」

「……そうなのか？」

衣川くんの言葉に、西山くんは首をひねった。



「自分のことを知りたいのかもしれせんよお」

ミーナがのんびりとした口調でそう言いながら、本棚の中から鳥類の図鑑を手にとった。それを合図にしたように、私たちはカラスがのっている本をさがし始めた。

図鑑、絵本、写真集。

閲覧デスクにどんどん本を運び、ヤタガラスに向かって、

「さがしているのはこれ？」

と、見せてみる。

けれど、ヤタガラスは、どの本を見ても小首をかしげるだけだった。

私たちは必死になつてさがしたけれど、ヤタガラスのお気に召す本は見つからない。しまいには、まるで私たちがふがいなくとも言うように、『カアカアカアッ!』と、激しい鳴き声で怒られてしまった。

「お前、そうカリカリするなよ」

衣川くんがヤタガラスをなだめようと体に手を伸ばしたら、ヤタガラスは羽ばたいて衣川くんを威嚇した。

「落ち着かせようと思つて、なでてやろうとしただけなのに、なまいきな奴だなあ」

「衣川。ヤタガラスは神様のお使いだ。なれなれしい態度だと、怒られるに決まっている」

まじめな顔で注意をする西山くんに、衣川くんが唇をとがらせる。

「神様のお使いっていつでもカラスじゃん」

「神様の、お使い……」

私はふと西山くんのその言葉にひっかかりを覚えた。

あれっ? そういえばさつき、そんな言葉が書かれた本がなかったっけ?

私は本棚に戻ると、背表紙をなぞつて、さつきは気にも留めていなかった本をさがした。

「どうしたのだね、花村君」

私の必死な様子に気付いたのか、葛城くんが歩み寄ってくる。

「私、思つたんです。ヤタガラスがさがしているのは、普通のカラスがのつた本じゃないん

じやないかなつて。——あつ、あつた!」

目的の本を見つけた私は、背表紙に指をかけて引つ張り出した。

そのタイトルは『神様のお使いになつた動物たち』。

私の手元を見た葛城くんが、わずかに目を見開き「ほう」とつぶやいた。彼には、私がなぜこれをさがしていたのか、理由がわかつたみたい。

私は急いでページをめくった。

どのページにも、動物のイラストが描かれていて、子どもも読みやすいように、大きな字で説明が添えられている。

「お稲荷さんのお使いはキツネ、天神さんのお使いはウシ、大黒天様のお使いはネズミ、毘沙門天様のお使いはトラ……」

その本は、神様のお使いとされている動物たちと、関係する神様や仏様、神社やお寺、伝説などを紹介していた。

以前、西山くんのお家の稲荷神社で出会った空耶さんも、ウカノミタマノカミ様にお仕えしている霊狐だって言っていたし、稲荷神社の中にもたくさんさんのキツネの像がある。キツネはお稲荷さんのお使いってことなんだ。

ヤタガラスも神様のお使いのガラスだから、きつとこの本にのっているはず。

「カラス、カラス……」とつぶやきながらページをめくっていた私は、ふと手を止めた。

そこには『龍』という見出しが書いていた。

「龍!？」

私の声に、葛城くんもハツとした表情になる。

「この本では、神様のお使いになった動物として、霊獣も含められているのか」

龍は水の神で、お寺では火事が起こらないようにお堂の天井に龍の絵を描くことがあるという話とか、龍王に頼まれて、龍神一族を苦しめているオオムカデを退治した勇敢な武将の伝説などが紹介されている。

その他に『ある湖に浮かぶ島に、龍を祀る神社とお寺がある』という記述を見つけて、私は「あつ!」と声を上げた。

「葛城くん! この島のお寺では、龍の骨が宝物になってるって書いてありますよ!」

私が、その島を写した写真を指さすと、葛城くんがポケットから手帳とボールペンを取り出し、すばやくその場所をメモした。

「龍の骨か……。碧の骨と関係があるのだろうか」

「行つて、お話を聞いてみたいです」

そのお寺の場所はどこだろうと確認したら、かなり遠い県にあった。子どもたちだけで行くのは無理そう。

今日みたいに、誰かの家族に連れていつてもらう?

でも、大人たちだって仕事があるし、京香さんも普段は大学に通っている。私たちのために、

そうそう時間を割けないと思う。

大人に頼むことができないのなら……自分たちで行つちやう……とか？
そんなことを考えていたら、ヤタガラスの怒った鳴き声が聞こえた。

『カアカアカッ！』

「あつ、ほうつておいてごめんね」

私は手にした本を持って、あわてて閲覧デスクへ戻った。

デスクの前に本を置き、カラスのページを再びさがす。

シカ、サル、タイ……次々と、さまざまな動物や魚の絵が現れる。

私はようやく『カラス』と見出しのついたページを見つけて手を止めた。

『ヤタガラスは熊野の神様のお使い』と書かれている。

さつき葛城くんが説明してくれたヤタガラスについての伝説や、関係のある神社の名前なども記されていたけれど、ヤタガラスを描いた絵だけがない。

まるで、抜け出したかのように、ぽつかりと空白になっている。

「他のページには、動物の絵が描かれていたわよね？」

皇さんが不思議そうにつぶやく。

デスクの上のヤタガラスの瞳が、キラリと光った。

大きく羽を広げ、バサツと飛び上がったかと思うと、本に向かって飛んでくる。

「花村君、危ないっ！」

葛城くんが、本を押さえていた私の手をぐいっと引っぱった。

ヤタガラスは開いていたページに飛びこむと、紙の中に吸いこまれるように姿を消して——
なんと、さつきまで空白だった部分に、三本足の立派なカラスの絵が浮かび上がっていた。

「ど、どういうこと？」

「ヤタガラスさん、消えちゃったあ」

「何が起こったのかしら？」

目を丸くしている私、ミーナ、皇さん、ぼかんとしている衣川くん、西山くんの横で、葛城くんだけが「そういうことか」と納得したように笑っている。

「あのヤタガラスは、この本から飛び出したものの、自力では戻れずに、本を開けてくれる者をさがして、館内をさまよっていたのだな」

「ここでの本を見ていた誰かが、ちゃんとしまわずに開きっぱなしにしていたのかな？
だから、ヤタガラスさんは、外の世界が気になって出てきちゃった……とか？」

私の考(かんが)えに、皇(すめら)さんが同意(どうい)する。

「神様(かみさま)のお使い(つかい)なの(な)もの。そんなことができても不思議(ふしぎ)じゃないの(な)かもしれないわ」

「その後(あと)、博物館(はくぶくわん)の(ひと)人が気付(きづ)かず(な)に本(ほん)を閉(と)じて、本棚(ほんだん)に片付(かたづ)けてしま(し)った……」

西山(にしやま)くんが、皇(すめら)さんの言葉(ことば)に続(つづ)けるよう(よう)にそう言(い)うと、衣川(いがわ)くんがパチンと指(ゆび)を鳴(な)らした。

「ありえる！」

「カラスさん、戻(もど)れてよかつたですう」

ミーナが両手(りょうて)を合(あ)わせてにこつと笑(わら)った時(とき)、

「もう閉館(へいかん)ですよ」

と、声(こゑ)が聞(きこ)えた。

ハツとして振(ふ)り向(む)くと、ライブラリーの入(い)り口(ぐち)に博物館(はくぶくわん)の係員(かかりいん)さんが立(た)っていて、私(わたし)たちに呼(よ)びかけていた。

どれくらいの間(あいだ)、ライブラリーにこもっていたんだろう。

私(わたし)たちは「すみません。急(いそ)いで出(で)ます」と謝(あやま)って、あわてて本(ほん)を戻(もど)そうとしたけれど、係員(かかりいん)

のお姉さん(ねえ)は微笑(ほほえ)みながら、

「そのままにしておいていいですよ。片付(かたづ)けておきますから。勉強(べんきょう)熱心(ねっしん)ですな」

と、言(い)ってくれた。

博物館(はくぶくわん)の外(そと)に出(で)ると、朝(あさ)の天気予報(てんきよほう)のとおり、雨(あめ)が降(ふ)っていた。

エントランスの屋根(やね)からは滝(たき)のように水(みず)が流(なが)れ落(お)ちていて、かなりの大(おお)雨(あめ)だ。

屋根(やね)の下(した)にいた京香(きょうか)さんが振(ふ)り向(む)き、スマホをいじっていた手(て)を止(と)めた。

「勉強(べんきょう)になった？」

閉館(へいかん)時間(じかん)にな(な)ったから、先(さき)に出(で)て、私(わたし)たちを待(ま)っていてくれたんだらう。

私(わたし)は京香(きょうか)さんに、ぺこりと頭(あたま)を下(さ)げた。

「遅(おそ)くな(な)ってすみません」

他(ほか)のみんなも口々(くちぐち)に京香(きょうか)さんにお礼(れい)を言(い)う。

「おかげさまで、よい時(じ)間(かん)を過(す)せました」

西山(にしやま)くんが九十度(きゅうじゅうど)におじぎをした後(あと)、衣川(いがわ)くんが京香(きょうか)さんに向(む)かつて両手(りょうて)を合(あ)わせた。

「姉ちゃん、待(ま)たせてごめん。暇(ひま)だったんじゃない？」

「別(べつ)にかまわ(な)ないわよ。スマホで漫画(まんが)を読(よ)んだり、彼氏(かれし)とチャットしたりしてたから。あんた

たちの勉強(べんきょう)にな(な)ったんなら、連(つ)れてきてよかつたわ」

京香さんは明るく笑って、衣川くんの背中を叩いた。

「友だちと一緒に、楽しく過ごせてよかったわね」

衣川くんは照れくさそうに鼻をかいている。

「いいお姉さんだなあ。」

私は一人っ子できょうだいがないから、こういう関係、ちよつとうらやましい。

「雨もひどいから、早く帰りましょう。みんな、家まで送ってあげる」

京香さんにうながされ、私たちは車にのりこんだ。

ところが、私たちはこの後、大変な事件に巻きこまれることになっちゃったんだ。

第二章 突然のお泊まり!?

一・トラブル発生!

博物館からの帰り道、道の途中で車をとめた京香さんは、ハンドルをつかんだまま眉間にしわを寄せた。

「困ったわね」

来た時は問題なく通れていた道の真ん中に、通行止めの看板と、三角コーンが置かれている。

「事故でもあったのかしら?」

心配そうな皇さんの隣で、葛城くんがスマホの画面に指を走らせた。

「どうやら、この先で土砂崩れが起こり、道が封鎖されてしまったようだ」

「姉ちゃん、ほかに道はないのかよ?」



衣川くんが京香さんにたずねると、ナビをいじっていた京香さんはため息をついた。

「ここを抜けるには、この道しかないみたいね。通行止めが解除されるまでは、山を下りられないわ」

ナビの画面をせわしなく動かしていた京香さんが、何かを見つけたのか、「あつ」と声を上げた。

「この近くに旅館があるみたい。今日はもう帰るのは無理そうだから、そこへ行つて泊まりましょ」

「おばあちゃん、心配しないかなあ……」

突然の外泊に表情をくもらせたミーナを安心させるように、京香さんが微笑む。

「私もご連絡するし、母からも電話を入れてもらうわね」

「泊まるにしても、俺たちは、そんなにお金を持っていないのだが……」

西山くんの心配どおり、私も少ししかおこづかいを持ってきていない。

旅館に泊まるお金を払うなんて、とても無理！

「私が払うわ。クレジットカードがあるから、大丈夫」

心配する私たちに、京香さんが大人の余裕で答える。

お金を借りるなんてもうしわけがないなあ……。後で母さんをお願いして、ちゃんと返さなきゃ。

京香さんが再び車のエンジンをかけた。Uターンして、来た道を戻り、途中で博物館へ行く方向とは別の道に入る。

上り坂を走っていくと、旅館名が書かれた看板が見えてきた。

門を入ったら、建物の前に駐車場があつて、私たちがのっているのと同じタイプの車と、小型のバスが停まっていた。

その隣に車を止め、私たちは雨の中を走り、旅館の入り口に向かった。

和風の玄関をくぐり、京香さんが「すみません」と声をかける。

すると、すぐに宿の人が姿を見せた。着物を着た、優しいような女の人だ。

私のお母さんぐらいの年齢かな？ この宿の女将さんみたい。

「いらつしやいませ。ご予約の方ですか？」

女将さんにたずねられて、京香さんは首を横に振った。

「いいえ。予約はしていません。この先で土砂崩れがあつたみたいで、山を下りられなくなつてしまったんです。お部屋があいていれば、泊まらせてもらいたいんですけど……」

京香さんが事情を説明すると、女将さんは「まあ！」と目を丸くした。

「それは大変でしたね。お部屋はあいていますから、どうぞ」

今日は、団体旅行客と、大学生グループが泊まっているらしい。

運良く二部屋だけあいていて、私たちは男子と女子で、部屋を分けることにした。

案内された部屋は隣同士で、とっても広かった。

晩ご飯は一階の食堂に用意されているらしく、部屋に荷物を置いた後、私たちはそろって食堂へ向かった。

二・超常現象研究会

食堂はテーブル席で、晩ご飯はbuffet形式だった。

すでにたくさん宿泊客が集まっています、わいわいと料理を取っている。

ゆかたでうろうろしているおじさんやおばさんたちは、団体旅行の人たちなのかな？

ひととき派手でにぎやかな若者の集団を見つけて、私の視線は自然とそちらへ向いた。

髪の毛を金色に染めたお兄さんと、体格のいいお兄さん、メガネをかけたお兄さん、毛先が

ピンク色のお姉さん、ショートカットの元氣そうなお姉さん。

大学生グループの人たちかな？

ぺちやくちやと、楽しそうにしゃべっている。

私の視線に気付いたのか、ピンク髪のお姉さんが振り向いた。

あつ、目が合っちゃった。

お姉さんは私に向かって、にこっと笑いかけた。

「あなたたち、小学生？」

「小学生と中学生です」

歩み寄ってきたお姉さんに答えると、お姉さんは「そうなんだね」と相づちを打った。

「もしかして、この上の博物館に勉強に來ていたの？」

「お姉さんたちもですか？」

「うん、ちがうわ。私たちは大学の超常現象研究会のメンバーなの。この山には大昔、ふもとの村を荒らしていたオムカデの妖怪が住んでいたという伝説があって、今も、そのオムカデが眠っている場所があるらしいのよ。その場所を調査しに來たんだ」